



## 「Ecology&Safety」を両立する建築資材の提案

チャンネルオリジナル(株)は、環境に配慮した建築資材の開発・生産・販売を行うメーカーです。

1998年の創業以来、「建築の外観は、社会の財産」を理念に掲げ、天然木を用いた外壁材や屋根材を開発してきました。その中でも象徴的な製品が、防火性能を備えた木製外壁材の「ウイルウォール」です。耐久性・耐候性に優れるウエスタンレッドシダーに特殊な防火処理を施すことで、日本で初めて下地に不燃材を使用せず、各種外壁構造において防火認定を取得しました。木の外観を通して、かつて日本の町並みに存在した趣きや美しさを取り戻したい——そのためには意匠性だけでなく、

環境と安全 = 「Ecology&Safety」の両立が不可欠であるという考えを、私たちは根幹に据えています。

また、森林資源との向き合い方も重要なテーマと捉えています。その考えを体現する製品のひとつが、「ウイルウッドクロス/シート」です。木材を最新技術で

加工することで、貴重な天然木の使用量を抑えながら、木がもつ質感や香りを空間に取り入れることを可能にしました。内装制限がある箇所にも使用できるため、設計の自由度を高める内装材として公共施設や店舗、ホテルなどでも採用されています。



建築確認検査、住宅性能評価、

住宅かし保険、構造計算適合性判定、

省エネ適合性判定などの業務を行っています。



一般財団法人 愛知県建築住宅センター



CONTENTS

法人協会の通信 79  
**チャンネルオリジナル株式会社** 表紙裏  
 片山 貴之

地域会だより 1

連載【隔月 全6回】**東南アジア建築紀行**  
 第6回 -「東南アジア近現代建築の輪郭を描く」- 2  
 岩元 真明

第41回 JIA東海支部設計競技 審査結果  
**インフラなきユートピア**  
 審査総評/大井 隆弘 4  
 受賞作品 5  
 ゲスト審査員よりコメント/西田 司 6  
 受賞者の声  
 ・金賞/岩田 陽澄 6  
 ・銀賞/田中 健翔・竹谷 和虎・石橋 陸人・高田 和樹 7  
 ・ゲスト審査員特別賞/小木曾 力斗 7  
 ・銅賞/杉本 健太郎・桂 良輔・小松 慧史 7  
 ・奨励賞/小原 瑞稀 7  
 審査員から見た設計競技/浅井 裕雄・北村 直也 8  
 運営委員から見た設計競技/高瀬 元秀・山口 千乃・水谷 夏樹 9  
 記念講演会レポート/寺田 智之 10  
 次年度へ向けて/六浦 基晴 10

三重発:活動報告  
**三重短期大学出張授業** 11  
 豊田 直樹

自作自演 270  
**長年の夢だった、自分で設計した家を建てた。** 11  
 西口 有紀

保存情報 第290回  
**正眼寺庭園 (観音像前庭)** 12  
 野々川 光昭

**編集後記** 12  
 谷村 茂・相原 宏康

三重発:主催事業報告  
**三重建築学生合同課題発表会2025** 13  
 森本 雅史

地域会だより 今後の予定

■JIA東海支部  
 ・3/19 支部役員会

■JIA静岡地域会  
 ・3/27 第10回役員会

■JIA愛知地域会  
 ・3/7 JIAマイクラ子ども建築家プログラム(愛知県児童総合センター)  
 ・3/27 第10回役員会  
 ・3/27 賛助会企業商品説明会 [トイレス工業(株)、(株)ニュースト]  
 ・3/31 愛知地域会ゴルフコンペ(桑名国際ゴルフ倶楽部)

■JIA岐阜地域会  
 ・3/6 日帰り研修旅行(兵庫-大阪)  
 ・3/17 第11回役員会

■JIA三重地域会  
 ・3/13 第7回例会、第8回役員会(対面オンライン併用)  
 ・3/未定 見学会

JIA に入会して

法人協会員



西尾 敦昌(JIA愛知)  
 株式会社ジャスト名古屋事業所

私は建物調査会社にて、20年間にわたり既存建物の調査に関する企画提案に携わってまいりました。なかでも3D点群技術の活用には特に注力しております。この度、JIAに入会させていただきました。諸先輩方や会員の皆様との交流を通じ、知見を深められることを大変心強く、また楽しみにしております。

最後になりましたが、入会にあたりご推薦を賜りました皆様に、厚く御礼申し上げます。今後とも何卒よろしくお願ひ申し上げます。

法人協会員



豊田 智哉(JIA愛知)  
 トイレス工業株式会社

トイレス工業株式会社の豊田智哉です。意匠と防災を両立する「トイレス工法(防災雨どい)」をご提案しております。設計思想を尊重し、納まりや技術面で伴走できる存在を目指しております。賛助会役員のお話も頂戴しており、より設計者の皆様に近い立場で理解を深めながら、精度の高いご提案につなげてまいりたいと考えております。

表紙 建築の生まれるところ vol.12

ロゴデザイン・表紙デザイン 小林 ミハル (トロスタジオ)



写真 田島 ナナ  
 (トロスタジオ)

建築が生まれるところをテーマに写真撮影をしています。

# 東南アジア近現代建築の輪郭を描く

私が意識的に東南アジアの建築をめぐるようになったのは、2011年頃のこと。ベトナムで建築設計に携わるなかで、東南アジアの建築を扱うメディアや研究、参照可能な資料が驚くほど乏しいことに気づかされた。その欠落感に突き動かされるように、自ら足を運び、各地の建築を訪ね歩いた。

それからおよそ15年が経ち、状況は確実に変わりつつある。本連載の最終回として、そうした変化を象徴する一冊、『mASEANa: ASEAN近代建築を読み解く』(原題: mASEANa: Appreciating Modern ASEAN Architecture, 未邦訳\*)を紹介したい(図①)。

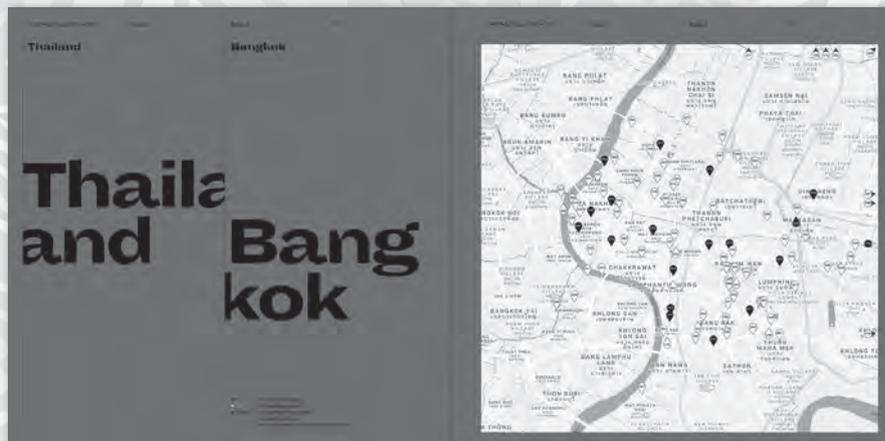


①『mASEANa: ASEAN近代建築を読み解く』、書影

## ●ASEAN近代建築研究の集大成

表題の「modern ASEAN architecture」は、東南アジアと日本の研究者たちによって構成された、ASEAN近代建築に関する国際的研究グループの名称である。同グループは2015年から2020年にかけて活動し、私もその一員として参加していた。あえて小文字で表記された「modern(近代)」には、西洋中心主義的な、大文字の「近代建築運動(Modern Movement)」から脱しようとする野心が込められている。『mASEANa』は一連の合同調査の成果をまとめた集大成であり、各国別の歴史叙述にとどまらず、東南アジア全体の近代建築史の大枠を提示した点において、画期的な書物と言える。

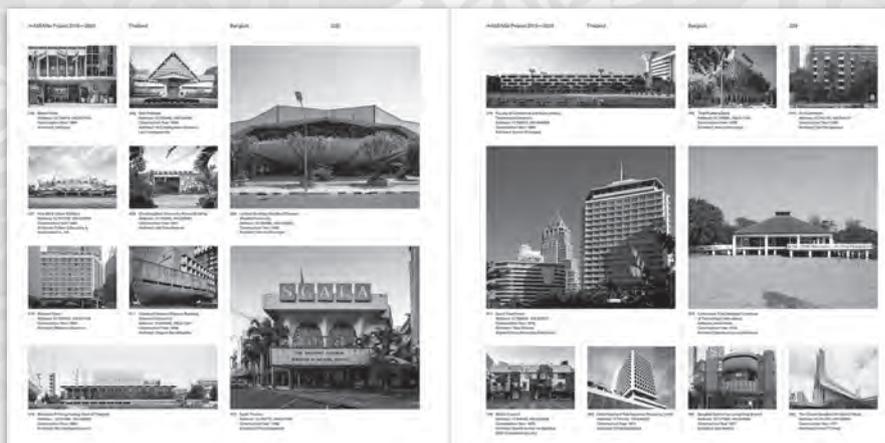
本書の対象は、東南アジア9都市——ハノイ、ホーチミン、ヤンゴン、ジャカルタ、プノンペン、バンコク、クアラルンプール、シンガポール、マニラ——の近代建築である。



②バンコクの章扉。紹介される建築の所在地を示すマップが示される



③バンコクの近代建築20選の一部



④バンコクの近代建築目録(100選)の一部

「ASEAN」を謳いながらもラオスとブルネイが含まれていないが、この点については今後の課題として明確に認識されている。各章では、都市ごとの近代建築史が概説された後、近代建築20選の解説と計100件の建築目録が提示される。紹介される建築はすべて写真つきで、眺めるだけでも図鑑のようで楽しい。また、各建築の所在地を示す

マップも収録されており、東南アジアの近代建築をめぐる旅行ガイドとしても使えるだろう。(図②~④)

## ●多様な「近代」

建築目録作成の作業は各地の専門家と日本人研究者の合同でおこなわれた。東京

大学の藤森照信研究室が1980年代に展開した東アジア建築悉皆調査の流れを汲むものとも言える。ただし、20選・100選の選定は各地の専門家が中心となっておこなわれ、日本人研究者による偏見は排されている。その結果、「近代」という概念そのものが各国で異なるかたちで理解されていることが明らかになった。

たとえば、ベトナム・ハノイの建築目録は19世紀末にフランス人建築家によって建てられたコロニアル建築からはじまり、2001年に建てられた空港によって締めくくられる。ミャンマー・ヤンゴンの建築目録は19世紀末のブリティッシュ・コロニアル建築からはじまり、2010年に完成したホテルで終わる。これらの「近代建築」の幅は広く、欧米や日本では「現代建築」と呼ばれるような近過去の建築まで含まれている。ベトナムやミャンマーではポストモダンと呼ばれる時代区分が明瞭でないのがその理由だろうが、考えてみれば日本でも「近代建築」と「現代建築」の境界は人それぞれで、漠然としている。

一方、マレーシア・クアラルンプールやシンガポールの目録を見ると、戦前のアールデコ調の建築からはじまり、1980～90年代の高層ビル群——レイト・モダンと呼べそうな建築——で終わっており、ここで示される「近代」は西欧が定義する「大文字の近代建築運動」(Modern Movement)に比較的近い。

「近代」の開始時期が各国で異なることも興味深い。ジャカルタの建築目録は18世紀の初頭にオランダ人入植者によって建てられた「バタビヤ市庁舎」からはじまる。日本では近世に当たる時期だが、西洋との邂逅を近代のはじまりと見なすという点では、明治を起点とする日本の近代と同じである。

このように、本書が示す東南アジアの建築目録は、「近代」という時代が一枚岩ではないことをまざまざと見せつける。なお、このように各国史を並列化する作業は、2014年のベネチア・ビエンナーレでレム・コールハースが総合ディレクターとしておこなった「近代の吸収: 1914-2014」展にも似ている。しかし、第一次世界大戦が勃発し、ル・コルビュジエがドミノ・システムを発表し

た1914年を起点とするコールハースの近代史観は、本書を読んだあとではきわめて西欧中心主義的に感じられる。

## ●底にある共通性

一方、本書に収められた建築の写真を眺めていると、国境を越えた類似点にも目が向く。建築史家・林憲吾による序論「東南アジア建築のスペクトル——一国史から地域史へ」は、まさにそうした類似に光を当て、地域全体の近代建築史の見取り図を提示する試みである。林は「多様性の中にみられる共通性」として、植民地期における近代施設の出現、両大戦間期に登場した折衷的建築、独立後の国家建設、冷戦下の建築、さらにはトロピカリティ(熱帯性)といった諸相を挙げている。

本連載で取り上げてきた多くの事例も、この見取り図の中に位置づけることができる。たとえば、プノンペンにおけるヴァン・モリヴァンの一連の建築は「独立後の国家建設」の典型であり、ヴィエンチャンの近代建築は、ソヴィエトの影響を受けた「冷戦下の建築」の好例と言える。また、チャトポン・チュエンルディーモル、ヴォ・チョン・ギア、リチャード・ハッセルなど、本連載で触れてきた現代建築家の多くは、多かれ少なかれ「トロピカリティ」を表現の軸に据えている。

熱帯気候に適応するためのブリーズ・ソレイユや大屋根といった建築的工夫が、「ときに西洋人建築家のオリエンタリズムの表現となり、ときに現地建築家のアイデンティティの表現となった」という林の指摘には、考えさせられるものがある。今日においても、先進国の建築家たちが熱帯地域に建てる「サステナブル建築」や「環境建築」のなかに、無自覚なオリエンタリズムが紛れ込んでいる可能性は否定できない。本書収録の論考「ハノイの近代建築史」を執筆したチュオン・ゴック・ランは、21世紀のグローバルイゼーションを、植民地時代、ソヴィエト時代に続く「外部からの第三の影響の波」と位置づけ、「外部からの文化的侵略の脅威との戦い」を開始すべきだと主張している。コロニアリズムやオリエンタリズムは、決して遠い過去の問題ではないのである。

## ●知の脱中心化は進む

ところで、このように東南アジア諸国の建築の共通性を知ると、日本との類似の多さにも驚かされる。19世紀後半に西洋建築を移入し、1930年代に帝冠様式を生み出し、1960年代に国家プロジェクトを実現し、1970年代以降は高層ビルによって都市の風景を変えてきた日本。その「近代化の物語」は、本書で描き出される東南アジア諸国の近代建築史とおおむね一致している。それゆえ東南アジアの建築を学ぶことは、日本を相対化する上でも役に立つ。ここに、日本人研究者が東南アジア研究に参加する一つの意義がありそうだ。

東南アジアの建築史を描く試みは、いずれ日本や中国、韓国などの東アジアの近代建築研究と合流し、さらには南アジア、アフリカや南米の建築史研究とも比較可能になるだろう。知の脱中心化は着実に進行している。そして、こうした研究に対応するように、地域の個別の課題を、普遍性へと接続して創作を行う建築家たちも登場している。新たな建築の価値観、新たな建築の美学は、弛まない研究と創作の往還のなかから生まれるに違いない。

\*以下ウェブサイトにおいて、『mASEANa: ASEAN近代建築を読み解く』の購入、およびPDF版無料閲覧が可能である。

<https://www.maseana.iis.u-tokyo.ac.jp/book.html>



建築家  
**岩元真明** いわもと まさあき  
九州大学准教授、博士(工学)

建築家、九州大学准教授、博士(工学)。  
2008年東京大学大学院修士課程修了後、難波和彦+界工作室に入社。  
2011年～15年にヴォ・チョン・ギア・アーキテクト(現VTNアーキテクト)のパートナー兼ホーミング事務所所長。2015年よりICADA共同主宰。  
首都大学東京特任助教、九州大学助教を経て、2024年より現職。近刊に『ヴァン・モリヴァン——激動のカンボジアを生きた建築家(西山如三記念叢書1)』(millegraph, 2025)

# インフラなきユートピア

## ■課題文

私たちの不自由のない暮らしは多様なインフラによって支えられています、そのすべてを維持し続けることは困難になりつつあります。では、インフラが失われた先には、どのような暮らしが待っているのでしょうか。つい悲観的な想像に陥りがちですが、歴史を振り返れば、今のようなインフラが整備されたのはごく最近のことにすぎません。様々なオフグリッド技術も生まれています。

本コンペでは、「インフラなき世界」での“住まい”を募集します。失われてゆくものの大きさを認めたくえで、それでもなお「ユートピア」が成立するとしたら、それはどのような建築になるのでしょうか。

ここでいう“住まい”は、必ずしも一戸の住宅に限りません。従来の家族像に縛られる必要もありません。ただし「人が暮らすための建築」であることを条件とします。新しい技術は全てを解決してくれるのでしょうか？ 周辺環境や地域との関係性も、より重要な要素となるはずで

## 一審査総評一

第41回JIA東海支部設計競技は、これまで審査会場は名古屋市で実施してきたが、三重、静岡、岐阜県における地域開催を目指すことになり、今年度は三重県での二次審査会が実現した。「インフラなきユートピア」というテーマ設定も地域開催を念頭にいたもので、三重県を中心に地域の現状や課題に関する議論の結果である。現在あるインフラに依存しないかつての暮らしを評価しながらも、近年の社会と向き合った新しく魅力的な暮らしの場の提案を求めた。以下で、受賞作品を紹介したい。

金賞の「母屋はつかの間、ちっちゃなユートピア」は、母屋から仮設の離れに設備をそっくり移し、母屋がレールの上を移動するという提案で、離れとの距離関係によって母屋に多様な位置付けを獲得させようとする意欲的な作品である。母屋と離れが隣接する農家建築のような関係を端緒に、距離が離れるにしたがって母屋が別荘のように変化していく。母屋が獲得する機能の多様性については説明不足だったが、母屋が自由に移動する様子が、美しいドローイングによって魅力的に表現されていた。居住誘導区域(立地適正化計画)から除外されたエリアの住宅が、都市部へと移動してくる可能性等も想起させた。

銀賞の「野性的ユートピアへのすゝめ」は、志摩・波切に建設された電波塔を、地域住民の活動や来訪者とのコミュニケーションの場、さらには展望台へと生まれ変わらせようとする提案である。「絵描きの町」として知られる波切を対象地に選定したことで、展望台は絵描

きの視点場になり、交流の場としても説得力が高まった。役割を失った電波塔を活かしながら、情報や活動、コミュニケーションといった目に見えない新しいインフラへと変換し、魅力ある建築としてまとめた点を評価したい。

同じく銀賞の「水環の郷〜水が巡り、人が生きる循環型の楽園」は、温暖化により海水面が上昇した未来の沿岸部を想定し、水耕栽培と魚養殖を組み合わせた循環型農法であるアクアポニクスを集落全体で構想しようとする提案である。高層化した装置はむしろ高密度な都市部で実施されるべきものと思われたが、自然界に対してオープンな循環システムとして提案されたことで、インフラがつくりだす未来の文化的な景観を想像させる案であった。

続いて銅賞の「半島住宅群」は、渥美半島の先端部を対象敷地に選定し、各種インフラのリニアな供給システムを、複数の選択肢をもつ緩やかなシステムとして再構築しようとする提案であり、明快なダイアグラムに惹きつけられた。また、「水系インフラとともに生きた町の過去と未来の物語」は、滋賀県伊庭町を舞台に、過去の水路を足湯施設などとともに再現しようとする提案で、詳細な実地調査に基づく構成が印象的であった。「Reconnect space」は、インフラのない世界を仮定し、そこでどのように暮らしの場が形成されるかを、面を組み合わせ合わせた構造物として示したものであり、人だけでなく動物との共生を想定した点に独自性が見られた。

西田司氏によるゲスト審査員賞は「野生の

手引き〜環世界としての付属小屋〜」で、農村集落において動物や昆虫との共生を目指した提案である。フィールド調査によって導き出された13の要素を組み合わせることで小屋を構成している点が特徴的であった。人と動物や昆虫が互いに利益を得る共生関係ではなく、利益のない状況においてもなお併存する世界を描き出しており、映画の群像劇のような世界観に魅力を感じた。

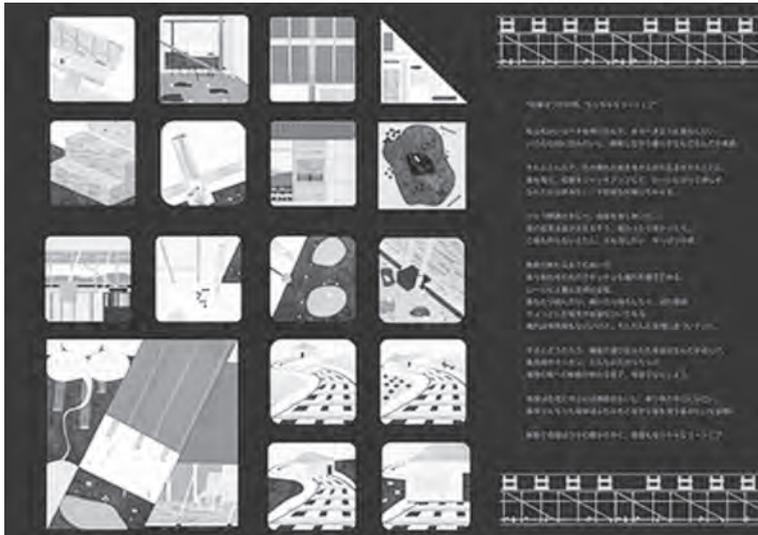
最後に、二次審査の対象とはならなかったが、地元高校生からの応募に対して奨励賞が贈られた。「外部からのインフラに頼らない自給自足の暮らし」は、複数戸で一つのユニットを形成する円環状の集落と、農地や畜産施設を配置することで集落の自給自足を検討した提案である。住宅の間取りに至るまで設計された肌理の細やかな計画が評価された。

受賞作品を概観すると、完成されたユートピア像というよりも、これからの社会や地域を考えるための「問い」として機能していたように思われる。インフラを前提としない視点は、都市や建築の思考を解放し、新たな可能性を切り開く契機となる。今回のコンペが、参加者それぞれの今後の実践へとつながるとともに、地域や社会に対する新たな議論を生み出す契機となればと期待している。



大井 隆弘  
三重大学工学 准教授

**【金賞】**



母屋はつかの間、ちっちゃなユートピア 岩田 陽澄 (福井大学工学部建築・都市環境工学科 4年)

◎審査員長

大井 隆弘  
(三重大学准教授)

●ゲスト審査員

西田 司  
(株式会社オンデザインパートナーズ/  
東京理科大学准教授/JIA 会員)

○審査員

浅井 裕雄  
(有限会社裕建築計画/JIA 会員)

○審査員

北村 直也  
(北村直也建築設計事務所/ 名古屋  
造形大学非常勤講師/JIA 会員)

**【銀賞】**



野性的ユートピアへのすゝめ  
田中 健翔 (名城大学 理工学部 建築学科)



水環の郷 -水が回り、人が生きる循環型の楽園-  
竹谷 和虎、石橋 陸人、高田 和樹 (岡山県立大学 大学院 デザイン学研究所)

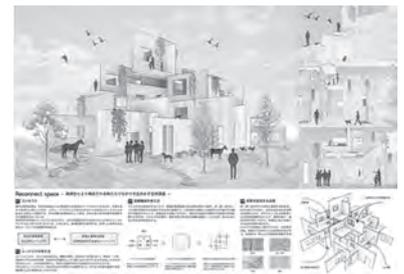
**【銅賞】**



半島住宅群  
杉本 健太郎 (アトリエカメムシ)



水系インフラとともに生きた  
町の過去と未来の物語  
桂 良輔 (近畿大学大学院 システム工学研究科)



Reconnect space  
小松 慧史 (株式会社第一設計 設計部)

**【ゲスト審査員  
特別賞】**



野生の手引き-環世界としての付属小屋-  
小本 力斗 (大同大学大学院 工学研究科)

**【奨励賞】**



外部からのインフラに頼らない自給自足の暮らし  
小原 瑞希 (三重県立 津工業高等学校建設工学科)

各作品の詳細は、設計競  
技HP (右記QRコード)  
に掲載しています。  
ぜひご覧ください。  
[http://www.jia-tokai.org/  
competition/archives.htm](http://www.jia-tokai.org/competition/archives.htm)

設計競技HP



# ゲスト審査員よりコメント

## 設計競技を俯瞰して

“インフラなきユートピア”というテーマに対し、インフラが現在の都市生活を維持する装置で、その装置(の一部)が無くなった世界を建築で描くというユニークなコンペであった。特に、二次審査に残った作品はどれも、作者が描いた世界に共感を持てるものばかりで、なんなら、提案されたインフラのない世界の豊かさは、現在の我々の暮らしが当たり前と感じていることを揺さぶり、現代都市を見直すきっかけを与えてくれているようにも感じた。

金賞になった「母屋はつかの間、ちっちゃなユートピア」は、曳屋という時限的で、インフラがなくなる時間が、実は家から日常の機能を剥奪し、何も無い空っぽ状態の家の価値を住み手が気付けるという設定が素晴らしかった。その時間軸のデザインを、断片化してボードにまとめた表現も創造的で、一見普通の住宅にも住人の愛着があり、それを引越した時に、一緒に動かすことで、そこで気づく暮らしや設計の断片が設計の手がかりとして表現さ

れていた。銀賞になった「水環の郷～水が巡り、人が生きる循環型の楽園」は、温暖化の海面上昇により水と暮らすことになる世界において、アクアポニクスを建築として集落の中に位置付ける設定が素晴らしく、変化した海岸線と水際都市の関係をデザインしていた。同じく銀賞の「野性的ユートピアへのすゝめ」は、これまでのインフラとしての役割が無くなった電波塔が、コミュニティのインフラに変化していく様を描いており、アダプティブ・リユースとしての設計価値が高かった。

西田賞となった「野性の手引き一環世界としての付属小屋一」は、設計対象を、人間以外の動物や植物などに展開していった時に、人間中心の設計がどう変わっていくかを試みた意欲作であった。動物や植物の生態系は、人間とは異なる時間軸や動きを持っているが、その人間以外の環世界から、これまで人間のために作られてきた建築や都市を再描写することにポテンシャルを感じる。人間以外の環

境に対して設計の仕方がどう変わり、建築のデザインがどうなっていくのか、これからの時代に価値を持つ提案であった。

卒業設計などで、よく話題になることであるが、良い問いや設定や敷地に出会うと、設計の手がドンドン進み、考え続けることにストレスを感じなくなる。今回のテーマ“インフラなきユートピア”は、少し未来的で、ただ自分の暮らしの周辺にも関係しており、良い問いや設定や敷地を考える丁度良い補助線だったのではないかと。2次審査会のプレゼンテーションが、どの提案もバージョンアップしている状況を見て、設計を考え続ける楽しさを感じる時間であった。



西田 司 (JIA神奈川)  
株式会社オンデザインパートナーズ  
東京理科大学 准教授

## 受賞者の声

### 【金賞】

#### 母屋はつかの間、ちっちゃなユートピア

本提案は、ジオデシックドームがヘリコプターによって運ばれていく一枚の写真を雑誌で目にしたことから始まった。建築が軽やかに地面から離れていくその姿は魅力的である一方、仮にそれが家であったなら、そこには暮らしの痕跡や、住み手が積み重ねてきた記憶までもが、軽く扱われているように見えるのではないかと感じた。

私たちの少なからずは引越しを経験する。さらに都市の縮退が進めば、住み慣れた町そのものから移動する可能性も否定できない。その際、失われるのは愛着のある建物だけでなく、生活の記憶でもある。移動は常に身近にあるにもかかわらず、そのあり方を建築として考える機会は多くない。家は重量的に重く、同様に敷地に張ったインフラや、法、記憶の根も重い存在である。その物理的かつ制度的な重

さを引き受けたまま移動する建築を考えることが、本提案の出発点となった。

「インフラなきユートピア」というテーマは、曳家という行為と自然に重なった。地面から離れることは、すなわちインフラへの接続が失われることでもある。地面からジャッキアップされた母屋は曳家によってゆっくりと移動され、その過程で、曳家に用いられるマテリアルを転用した仮設の離れが建てられる。離れは、必要最低限のインフラを担い、母屋の移動を支える拠点となる。母屋と離れの関係は時間とともに変化していく。インフラが失われた母屋は、移動するフラットな空間として、敷地や町、さらには国境すら越えていくかもしれない。

移動の一瞬一瞬が、つかの間のユートピアとして立ち現れる構成である。

人口減少が著しい都市で学ぶ学生として、

地方のインフラの維持が喫緊の課題だと身をもって痛感している。一方で本提案では、仮説的で楽観的な応答によって、その現実を別の角度で思考することを試みた。最後になりましたが、この提案を正面から受け止め、議論くださった審査員および関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。



岩田 陽澄

福井大学工学部建築・都市環境工学科 4年

## 【銀賞】

## 野性的ユートピアへのすゝめ

この度は銀賞を頂き、大変光栄に思います。「野性的ユートピアへのすゝめ」は、少子高齢化の進む集落で人々が町を開拓するように関わり合いながら暮らせる風景の提案です。インフラが町の祭や漁業等の文化を受け止めるやぐらのように変わっていきけるということを構想しました。

今回の提案を通して、地方における豊かさとは何かという問題意識を再考するきっかけとなりました。今後も人々の暮らしや社会へ貢献できる建築について考えていきたいです。



田中 健翔  
名城大学 理工学部 建築学科

## 【銀賞】

## 水環の郷 -水が巡り、人が生きる循環型の楽園-

本設計競技は、建築とインフラの関係性を深く問い直し、その新しい可能性を探求する貴重な機会となりました。抽象的なテーマから自分なりの問いと答えを構想し、提案として形にする難しさと面白さを実感しました。地方で建築を学び、地方で生きる者として、今回頂いた講評と「ユートピア」構想を通して深まった自給自足への認識を、今後はより現実的な住まいのあり方へ還元していきたいと考えています。



竹谷 和虎、石橋 陸人、高田 和樹  
岡山県立大学 大学院 デザイン学研究科  
デザイン学専攻 建築学領域

## 【ゲスト審査員特別賞】

## 野生の手引き -環世界としての付属小屋-

この度は、貴重な審査の機会をいただき、またゲスト審査員特別賞という光栄な賞を賜り、誠にありがとうございました。「インフラなきユートピア」というテーマに対し、人間と生き物がそれぞれの世界観で生きられる建築を提案しました。講評会や懇親会では、提案内容やその表現についてさまざまなご意見、ご指摘をいただき、改めて作品を見つめ直すことができました。今回の経験を糧に、今後も学業に邁進してまいります。



小木曾 力斗  
大同大学大学院 工学研究科

## 【銅賞】

## 半島住宅群

愛知県の知多半島を例として題材に、インフラの代替として、その土地の気候風土に合った、自然の特性を生かした暮らし方を営む家々が、緩やかに繋がり、適度に関係し合う姿をユートピアとして提案している。従来の線形的なインフラ網に対し、インフラなき点の集合体が、複合的に重なり合って関係するイメージである。ここでは、生業に目を向ければ、農山漁村、自然エネルギーでは、太陽光、風力、地熱、その他観光や二拠点居住など、多種多様な住宅が広がる。



杉本 健太郎  
アトリエカメムシ

## 【銅賞】

## 水系インフラとともに生きた町の過去と未来の物語

自分がテーマに対して出した応えと提案に対して共感頂いた嬉しさと同時に反省点や課題も多く見つかり、充実した1日を過ごすことができました。

今回の審査会を経て、建築はリサーチだけではなくしっかり形や空間で表現しないとイケないと恥ずかしながら再認識することができました。

審査員の方から頂いた言葉を振り返ってブラッシュアップを行い、これからも建築に対して“貪欲に”学んでいきます。ありがとうございました。



桂 良輔  
近畿大学大学院 システム工学研究科

## 【銅賞】

## Reconnect space

この度は、栄誉ある賞を賜り、誠にありがとうございます。本作品では、インフラなき状態を数値管理による固定から解放された状態と捉え、人と自然が再び緩やかにつながる空間の可能性を探りました。床・壁・天井を三次元的に再統合することで、建築を生態系の一部として捉え直しています。完成形まで詰めきれなかった課題も含め、今後も建築が人や環境とどのように関係し得るのかを問い続け、思考と実践の両面から表現を深めていきたいと考えています。



小松 慧史  
株式会社第一設計 設計部

## 【奨励賞】

## 外部からのインフラに頼らない自給自足の暮らし

『インフラのおかげでとっても便利になった社会で育ってきたので、無いて考えると不安ばかりで、でもユートピアなら、どうやってなんとかしてそうかかって考えました。インフラが無いということは現在よく使われているスマホ等の電子機器も使えない、なら、なぜ幸せを感じるかな、生活を回せるかなって考えて、人と人の繋がり、ご縁だと思いました。外部とのインフラが整備されていないなくても、その集団の中で楽しく過ごせるように出来たなら、ユートピアって呼べると思い、村づくりのようなテーマでかきました。』



小原 瑞稀  
三重県立 津工業高等学校建設工学科

# 審査員から見た設計競技

## インフラなきユートピア

課題文には「インフラが失われた先には」と記されていた。本来、社会は豊かさを求めて発展していくものだが、人口減少によってその従来の発展方式がきしみ始めている。

今回の提案の中に多く見られたのは、「インフラから外れることの自由な感覚」だった。便利なものは、実は人間を束縛しているということに、多くの参加者が気づいていた点はとても面白い。そもそもインフラの恩恵は多様な価値によってもたらされているが、使う側の価値観と照らし合わせて相互評価してみると、実は不要なものも含まれている。これまではそれらを放置したまま進めてきたが、そろそろ手に余る状況だ。「一度リセットしてみてもどう

か」という問いかけを含む提案も多かった。

その「リセット」の先に見出されたのは、人と生物が同じインフラの上で生存していく姿であった。それは家畜や自然の生命、そして人類の進化の再構築を試みているようでもあり、ある意味ではより「農耕的」な世界への回帰にも見えた。また、小さなコミュニティ同士が重なり合うように補充関係を結ぶことで、新たなインフラネットワークが形成されるような提案には、限界集落を救う糸口も感じられた。

ユートピアは「どこにもない場所」とも理解できるが、同時に「追い求めるモノ」でもある。現代においてそれは「再構築」と言い換えられるかもしれない。人類が複雑な現代社会を手

に入れたからこそ、このテーマは繰り返し出現するのではないだろうか。

最後に、今回の設計競技を三重で開催できた意義は大きい。テーマに即した場所で、参加者がその空気を肌で感じながらプレゼンテーションを行えたことは非常に良かった。リアリティのある世界の延長線上にこそ、実現可能なユートピアがつながっているのだと思う。

浅井 裕雄 (JIA愛知)  
裕建築計画



## 審査を振り返って

現代建築はインフラの存在を前提に計画される。本コンペではその前提を無くすことで建築表現がいかに広がり、どのような新しい価値が見出されるかを問い直した。利便性と引き換えに新たなものの見方や価値を発見するきっかけになるのではないかと。審査にあたっては、そうした未知の可能性への期待感を重視した。

金賞「母屋はつかの間、ちっちゃなユートピア」は、曳家、DIY、仮設によりユートピアを日常の延長にある自由さと定義し本テーマに対して鮮やかな応答を示した。質疑応答では一点

突破型の提案であるために満票とまではいかなかったが、全体として高い支持を集めた。審査後の懇親会で本人から概ね狙い通りの評価を得られたとの言葉を聞き、コンペにおける戦略的センスの高さも確信した。

私自身、かつて取り壊し予定の10畳の平屋を改装し家族4人で暮らした経験がある。DIYで巨大な二段ベッドやキッチン、洗面を設えたその住まいは決して立派なものではなかったが、自らの手で生活を形作る自由さに満ちていた。本作には、超未来的な飛躍ではなく、理想や軽やかさが日常の延長線上にあるという

強い共感性が宿っている。

今回の入賞案はどれも新しい価値を探るきっかけに満ちていたが、金賞案は特にその意識を強く感じさせた。提案の根幹に魅力と求心力があることは、実際のプロジェクトにおいても最も重要な資質である。金賞にふさわしい実に見事な提案であった。

北村 直也 (JIA岐阜)  
北村直也建築設計事務所



## 運営委員から見た設計競技

### 設計競技を終えて～レーモンドホールでの2次審査～

今年で41回目を迎えた設計競技は毎年名古屋で開催されてきたため、支部事業なのか愛知地域会の事業なのか分かりづらい状況となっていました。せっかくの支部事業なので東海すべての地域会で共有したいと、支部長の後押しもいただき、地方開催を試みることとなり、初年度の今年は三重で開催することになりました。

会場アクセスや費用面から、1次審査は例年通りTOTOテクニカルセンター名古屋をお借りし、2次審査を三重県内で行うこととし、伊勢志摩、伊賀などの会場を模索しましたが、比較的アクセスのよい津市の三重大学レーモンドホールに落ち着きました。

レーモンドホールはアントニオレーモンドの初期の木造建築で、丸太の小屋組みをそのまま生かした意匠が特徴的な建築で、重要文化財にも指定されています。設備面が脆弱な古い建物ですが、2次審査の発表者の方もレーモンドの建築での審査講評であれば、地方まで来てもらう意味があるのではないかと考えてのことです。

レーモンドホールでの2次審査は、小さなトラブルはあったものの、無事に終わることができ、地方開催の可能性が開けたと感じています。初年度を終えたことでノウハウが多少なりとも積みあがったので、今後につなげていきたいと思っています。

今回地方開催をやってみて、テーマ選定から会場選び、また当日の運営まで、開催地の地域会の協力が必要不可欠と感じました。ご協力いただいた三重地域会の方には感謝申し上げます。また、例年協賛いただいている企業様にも改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。



高瀬 元秀 (JIA三重)  
タカセモトヒデ建築設計

### 設計競技を終えて

今回このコンペが掲げた「インフラなきユートピア」は、インフラを肯定も否定もせず、私たちが無自覚に依存してきた前提を一度手放し、建築が担ってきた役割を問い直す試みだったように思う。電気・水・交通などといった物理的基盤だけでなく、制度、数値、時間、効率といった不可視のインフラが、暮らしや空間の振る舞いをどこまで規定しているのか。本課題は、その境界を意識化する機会を与えてくれた気がしている。

審査を通じて印象的だったのは、インフラが失われた「結果」を描くよりも、インフラと距

離を取る「過程」や「態度」を設計しようとする提案に、建築的な可能性が随所に感じられた点である。そこでは完成形よりも、暫定性や編集、関係の編み直しといった時間的な操作が重要な意味を持っていた。

多くの提案に可能性を感じる一方で、配置や構成に至る思考の道筋、あえて詳細化しなかった判断基準まで示されれば、提案はさらに一段深く読み取られ、建築としての説得力もより確かなものになっただろう。

人口減少やインフラ維持の限界が現実の課題となる中、残念ながら建築はすべてを解

決する存在ではない。しかし、何を残し、何を手放し、どのように関係を結び直すのかという判断の「場」をつくることは、依然として建築に託されている役割である。ユートピアとは完成された理想郷ではなく、暮らしを更新し続けるための「思考の装置」なのではないかと、本競技を通して改めて感じている。



山口 千乃  
CEN ARCHI

### 「みんなで考える」設計競技

今年度のテーマ設定は、率直に言えば「欲張り」な試みであったと思う。

小さな地方コンペとしての立ち位置を自覚しつつ、JIA東海支部が抱える内政的な課題と、純粋な建築への探求とをいかに両立させるか。そのために、大井先生にご協力いただき、地方と建築をつなぎ、具体性と抽象性を併せ持つテーマに挑戦した。

過去の審査員や知人からは、今年は難解すぎるのではないかと、表現の幅を制限するのでは

はないかという指摘も受けた。それらはもともとであり、次年度への宿題としたい。

一方で応募者の解釈は自由闊達で、当初の想定を超える新たな視点が提示されたことは大きな収穫だった。また審査においても、審査員各位がテーマに軸足を置きながら議論を深めてくださったことに感謝したい。

そしてこの欲張りな試みのまとめとして、本誌では例年の個別講評に代え、応募者・審査員・委員が同じ方向を向いて設計競技を振り

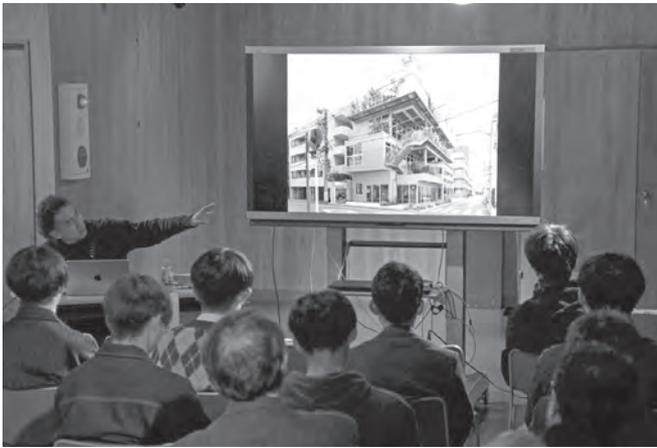
返る構成とした。本特集もまた、設計競技の意義やこれからの建築を考えるための手がかりとなるように、試行錯誤を続けたいと思う。



水谷 夏樹 (JIA愛知)  
水谷夏樹建築設計事務所

## 記念講演会レポート

## 西田司氏 記念講演会



「インフラなき」という言葉の重さをユートピアに変えてしまう、建築が社会にできることの大きさや柔軟性が受賞者の各作品から感じられた。これら全ての審査、表彰が済んだ後の西田氏の講演はその頭をほぐし、インフラと建築という単語がかみ砕かれ、自分の内にしっとり積み重なっていくのを感じる時間であった。

講演は「関係性のデザインから始まる空間のあり方」を軸とした10のレシピに基づいて

行われ、終始興味深く瞬く間に終了時刻を迎えた。

10のレシピには「なんでも住宅スケール」「public=private gathering」「メイドインローカルスペース」という視点が紹介され、手の届くスケールでの設計に気を配っている姿勢が見られ

た。西田氏はこれを「自分事化」と表現している。扱いきれないスケールの空間は使い手に寄り添うことができずどこか他人事のように感じる。特に関連して語られた異なる価値観の人がそれぞれに建物の中で中心を持つ「多中心」という言葉は自分事化のための重要な過程であると感じられた。最小単位のユニットが連なり、場の集合体として構成される空間は、それ自体が柔軟な社会基盤となり、従来の空

間インフラに依存しない新たな建築のあり方を示していた。

後半では現在の居住地であるメルボルンの街が紹介された。計画ガイドラインにより直接ストリートへアクセスする複数の入り口の設置が求められているなど、街路とのつながりを積極的に持たせる意図が感じられた。職能分業が進んだ働き方についても触れられ、専門性の高度化や合理化という利点と同時に、その課題についてもお話をいただいた。

街の魅力と西田氏の実践が重ねて語られた本講演はコンペの抽象性の高いテーマを人と人や人と建築の関係性の積み重ねとして再考させられるものであった。受賞者それぞれの描いたユートピアに、この講演がどのように映ったのか、構想から社会への足掛かりが示されたようであった。



寺田 智之 (JIA愛知)

黒川建築事務所

次年度へ向けて  
振り返りと展望

第41回 JIA 東海支部設計競技では、東海地区全体に目を向けた委員会方針のもと、一次審査を例年通り名古屋で実施し、二次審査を三重県津市の三重大学レーモンドホールにて開催しました。本方針に対し、各地域会の会員の皆さまから多大なるご協力、ならびにご協賛を賜りましたことに、心より御礼申し上げます。

長年にわたり名古屋開催が続く中、この方針によって委員会運営の負担増も懸念されていましたが、今回の取り組みにより、今後につながる新たな可能性を見だせたことは大きな成果であったと考えています。これは各地域会、また皆さま一人ひとりの支えがあってこそその成果と考えています。

入賞者アンケートにおいても、課題設定や開催地に対する評価は非常に好意的で、都

市部以外での実施を今後さらに広げていくことの意義と必要性を改めて認識しました。

一方で、二次審査には例年以上に多くの一般会員の方にご来場いただきましたが、JIA、そして私たちがさらに発展していくためには、学生や一般の方にも広く審査会を公開し、設計競技の魅力を伝えていく必要があります。

第41回の活動は確かに一石を投じ、波紋を生み出しました。この波紋を一過性のものとせず、支部全体へと広げ、設計競技と東海支部のさらなる活性化につなげるべく、来期も継続して取り組んでまいります。



六浦 基晴 (JIA愛知)

設計競技特別委員会 委員長



## 三重短期大学出張授業

JIA 三重地域会では研究・社会活動委員会の事業において学生への教育支援の一環として三重短期大学へ出前授業を毎年行ってきております。2025年度も例年通り、生活科学科居住環境コースの1年生を対象に後期の授業となる住生活設計I 課題2「戸建て住宅」について二回の訪問とし、一度目はエスキス段階で進捗の確認と助言を行い、二度目は完成作品の講評となりました。

どの学生も設計を習い始めて間もない中で、与えられた課題内容から大事にしたいキーワードを抽出し、それらが核となったプランや構想をしっかりと話してくれました。

自由な発想で組み立てられた設計に思わず微笑んでしまったり、納得させられたりと、学生と対話している時間はあっという



間で、日ごろの業務で凝り固まった私の考えをもほぐしてくれました。

講評では選抜された学生の作品について私たちの意見や助言を学生の皆さんに聞いてもらいました。ひとつの作品に対して様々な捉え方があったり、異なる視点で考えてみたりすると、まだまだ伸びしろが見つかるところに設計の面白さや奥深さを感じて貰えたのではないかと思います。



相乗的に向上や発展をもたらせるこの貴重な機会がこれからも続いていくことで新しい世代の建築家が誕生することを楽しみにしています。



豊田 直樹 (JIA三重)  
nao建築設計事務所

## 自作自演 270

## 長年の夢だった、自分で設計した家を建てた。

建てる時と決めるとき、まず考えたのは「これからの時間」だった。子どもたちの年齢的にもやがて巣立つ日が近く、この家で過ごす時間の多くは、私ひとりになるだろうということ。費用を抑えたかったこともあり、家全体のボリュームはできるだけコンパクトにした。子ども2人と私の寝室はそれぞれ

4畳半ほど。一方で、家族がそろう時間を大切にしたいという思いから、LDKはどこで過ごしていても存在が感じられるよう一体的で広々とした空間にした。

LDKは2階に配置し、大きな窓を設けた。この窓は、一般的な南向きではなく北東に向けて大きく開いている。朝にはやわらか

な朝日が差し込み、その後は一日を通して安定した光が入る。また、大きな窓越しに空が広がることで開放的になり、より広々と感じられる。とても落ち着いた居心地のよい空間になった。住み始めてから、この窓と空間、そしてこの家がとても気に入っている。

自邸を建ててみて改めて感じたのは、「常識」にとらわれないことの大切さだ。その土地の条件や、そこで暮らす家族のかたちを丁寧にくみ取り、それぞれにとっていちばん合った答えを探すこと。その積み重ねが、住み手にとって本当に心地よい空間につながるのだと思っている。



西口 有紀 (JIA三重)  
arbre建築設計室





完成当時の庭園「日本庭園歴史辞典」より



毒草窟から庭園を眺る



三十三石と観世音菩薩銅像

#### 【概要】

**名称**：臨濟宗妙心寺別格妙法山正眼寺庭園  
**作庭者**：重森三玲  
**所在地**：岐阜県美濃加茂市伊深町872-2  
**作庭年**：昭和43年9月～45年12月  
**参考資料**：「日本庭園歴史辞典」重森三玲著（昭和49年東京堂出版）

正眼寺は妙心寺開山無相大師関山国師慧玄和尚が1329年に開創され、1669年に妙心寺別格地として妙宝山正眼寺の名で再興された寺院である。本庭園は、明治34年の改築まで本寺本堂であった毒草窟（どくそうくつ）の西側に位置する。作庭家の重森三玲氏による本庭園は、昭和43年より着手された。正眼寺住職の梶浦逸老老子氏の発案により、空地に残されていた古井戸の上に奈良薬師寺式の観世音菩薩銅像を建立して、その井戸を納骨泉としている。観音立像の背後には築山と

石組みを配し、正面には観音の慈悲の靈光を思わせる放射状の敷石を施している。これに紫雲がたなびくさまを表した雲形の地紋を重ね、三十三の石によって、雲海上の三十三観音を表現している。重森氏は「庭中の古老木をそのまま生かし、従来の庭園設計にないものを創作した。他に類のない意表に出る作庭であり、禅院枯山水、近代枯山水としての特色のある点を観賞されたい。」と記している。庭園は駐車場奥に位置し、一般の来訪者も観賞することができる。



野々川 光昭 (JIA 愛知)

オウ環境設計事務所



## 編集後記

●編集後記をお願いしますとの連絡を受け、原稿を待っていたところ最初に送られた資料は「JIA東海支部設計競技」でした。課題は「インフラなきユートピア」とあり、各賞のプレゼと審査員の講評が載っているので一通り読むにつれ、50年以上前の自分の卒業設計をふと思った。それはある意味、銀賞「水環の郷」のコンセプトに似ているかもしれない。題は「City in the Sky」、100年後の世界を想定して森林の中に点在する塔状の都市に住む世界をA1セント紙6、7枚に鉛筆の下書き、ロットリングで仕上げるという大変な作業だがその表現は稚拙だったようです。

その数日後の2月2日「JIA東海支部大会2026静岡in伊豆の国」に参加した折の笠原一人先生の講演で、建築家村野藤吾の「三養荘」計画図のスライドを紹介してくれましたが、そのエスキスは鉛筆でグリグリ描かれ、なん

となく形態を示している物で、懐かしかった。ところで、今の方はCADを駆使し、コンセプトは生成AIを使うのだろうか？エスキスはやはり鉛筆でグリグリなのだろうかと思ひながら。

(谷村 茂)

●今号はJIA東海支部設計競技の審査結果を中心にページ数を増やした号の編集であり、連載も最終回を迎え読み応えのある冊子が出来たのではないかと感じます。そんな中今月号については、三重地域会の事業報告や自作自演など多くの記事を掲載して頂きました。三重県内で建築を学ぶ学生への支援事業や交流事業などです。一年を通してその他にも参加型の事業などを掲載して頂いています。しかしながら現状ではどうしても終了後の報告が中心になってきます。ARCHITECTの記事として残していく事を考えればこれで良いのかもと思うのですが、出来ることなら地域会だより(今後の予定)を充実できないかも今回記事を確認しながら感じました。地域会に

よっては会員数の減少から広報に時間が取れない事もあると思います。ARCHITECTも色々と変化をして行く事になると思いますが、変化した事を最大限生かせる編集を考えて行かなければと実感しました。

(相原 宏康)

## ARCHITECT

第450号

発行日 2026.3.1 (毎月1回発行)

発行責任者 浅井裕雄

編集責任者 東福大輔

編集 東海支部会報委員会

愛知地域会広報委員会

株式会社イヅミ内

ARCHITECT 編集部

岡崎市明大寺町荒井10番地

TEL (0564)21-2657 FAX 26-1792

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052)263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

http : //www.jia-tokai.org/

# 三重建築学生合同課題発表会2025



▲会場の様子



▲講師によるレクチャー



▲発表会の様子



▲三重の若手建築家の講師者



▲集合写真

## 開催概要

2025年12月13日(土)、JIA三重主催「第5回 三重建築学生合同課題発表会2025」を三重大学レーモンドホールにて開催しました。県内の建築系3校(三重大学2年生3名・三重短期大学2年生4名・近畿大学工業高等専門学校5年生2名)から選抜された学生が参加し、保護者や後輩、関係者を含む約35名が来場。歴史ある木造モダニズム建築の空間の中で、地方の学生ならではの穏やかな雰囲気の中にも真剣さを感じられる、充実した一日となりました。

本発表会は、各校で取り組んだ設計課題を発表し合い、学内評価とは異なる視点に触れることで建築の可能性を広げるとともに、学生同士の交流を促すことを目的としています。

今回の課題は、住宅、コミュニティセンター、宿泊施設+地域交流施設と多岐にわたりました。用途や与条件の自由度はそれぞれ異なり、設計アプローチも多様でした。表現方法も、手描き図面から3DCAD・動画まで幅広く、各校の教育方針や個性が感じられる発表となりました。講評では単なる評価にとどまらず、「案の本質は何か」「どうすればより伝わるか」といった対話が重ねられ、学生にとって思考を深める貴重な時間となりました。

## 武保氏を迎えて～地域×学生×若手建築家～

ゲストクリティークには、伊賀市を拠点に活躍されている建築家・武保学氏をお迎えしました。県内若手建築家も加わり、多角的な視点から意見が交わされました。武保氏のショートレクチャーでは、理想だけでなく現実と向き合いながら地域で建築を続ける姿勢が語られました。影響を受けた二人の師の現在の在り方——後進へ財産を託す姿と、なお第一線で挑戦を続ける姿——を通して、「建築を続ける」ということの重みと豊かさを提示。また『43歳頂点論(角幡唯介著・新潮社)』にも触れ、長い時間軸でキャリアを捉える視点を学生に伝えました。設計課題を超えた“生き方”としての建築に触れる機会となりました。最後に三重短大・東條琳さんが武保賞に選ばれました。

## 継続が生む変化～地域×大学×JIA～

本発表会は今回で5回目を迎えました。当初はコロナ禍において学び続けた学生に発表の場を提供することに意義を感じていました。回を重ねる中で、各校の課題設定や準備体制にも変化が見られ、学校全体で発表者を支える動きも生まれています。ここで築かれたつながりが建築文化講演会への参加などJIA三重の他事業へと広がっ

ていることも、大きな成果です。また東海と近畿の接点にある三重という地の利を活かしてゲスト建築家を招き、地域を越えた交流の場を築いてきました。学生にとって貴重な経験であると同時に、建築家同士が刺激し合う場にもなり認知度も上がってきました。発表後には、学生・教員・JIA会員が作品を囲み、立場を越えて語り合う姿があり、こうした光景がこの発表会の意義を象徴していました。

継続が容易ではない時代ではありますが、まずは第10回開催を目標に頑張りたいと思います。ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。三重から、次世代の建築の芽がさらに力強く育っていくことを願っています。

### 歴代ゲストクリティーク

- 第1回 岸上 純子 (大阪)
- 第2回 大室 佑介 (三重)
- 第3回 三谷 裕樹 (愛知)
- 第4回 山口 陽登 (大阪)
- 第5回 武保 学 (三重)

(第5回 その他講師者：湯谷 紘介氏 (ゲスト)、久安 典之・米田 雅樹 (JIA 三重) / コーディネーター：高瀬 元秀 (JIA 三重))

森本 雅史 (JIA三重)

森本建築事務所





木を守る。  
暮らしを守る。

木材に特化した  
木材保護塗料・フローリングの  
グローバルブランド



〒461-0001 愛知県名古屋市東区泉1-14-23 ホワイトメイツ201  
TEL:052-253-9221 FAX:052-253-9226



営業品目(製造販売)

ビル用アルミサッシ 木製建具

株式会社 **ムトー**

本社 〒500-8269 岐阜県岐阜市西部中島3丁目57番地  
TEL.058-271-3482 FAX.058-271-6094  
アルミ本部 〒501-6062 岐阜県羽島郡笠松町田代1080  
TEL.058-388-2122 FAX.058-388-8044  
名古屋営業所 〒453-0015 愛知県名古屋市中村区椿町17-16  
丸元ビル6階  
TEL.052-526-1133 FAX.052-526-1135  
木工本部 〒501-6062 岐阜県羽島郡笠松町田代1178  
TEL.058-388-1618 FAX.058-388-0939

<https://www.c-mt.co.jp>

■アーキヤマデ(株)名古屋営業所

〒465-0025 名古屋市名東区上社5-103  
TEL052-715-6320 FAX052-715-6323

解体・防水・塗装

株式会社 **名神**

本社 〒500-8358 岐阜市六条南2丁目12番20号  
TEL058-271-7459(代) FAX058-271-7142

HITACHI **NOUBI**  
日立特約店 **濃尾電機株式会社**

本社 岐阜市宇佐南二丁目3番8号  
TEL(058) 272-7211 FAX(058)274-6677  
高山(営) 高山市山田町1645-1-1  
TEL(0577)32-4353 FAX(0577)33-1743

<http://www.noubi.co.jp/>



陽だまりの家。

身体にやさしい自然な暖かさ、  
床暖房は、遠赤外線を利用して春の陽だまりを創り出す、  
科学の力から生まれた新時代の健康暖房です。  
家庭に快適と健康を、床暖房で……。



温水式・電気式問わず、豊富な施工実績で厚い信頼を得ています。また輻射冷暖房の取り扱いもごさいます。お気軽にお問い合わせください。

**TAFU**

床暖房責任設計施工

<https://www.tafu.co.jp/>

株式会社 **タフ**

〒452-0962 愛知県清須市春日江先18  
TEL052-408-2258 FAX052-401-1778

**ENDO**

株式会社 遠藤照明

<https://www.endo-lighting.co.jp/>

株式会社 遠藤照明  
名古屋営業所

〒460-0002  
名古屋市中区丸の内三丁目20番3号  
BPRプレイス久屋大通2階  
TEL:052 (857) 2001 (代表)  
FAX:052 (857) 2002



公式サイト納入事例